

虹

に

弱くても間違っても

⑩2 負の感情も美術作品に

地球は虫の惑星だ。草原に、砂漠に、街に、庭に。見渡せば至るところにいる。見えない場所にも存在するだろう。たとえば、人の胸の中にも。

射水市出身の造形作家、川越ゆりえさん(36)は架空の虫の造形物を作る。ねたみに怒り、悲しみ、孤独感。人間の感情、とりわけ負の感情を独自の虫の形に託す。標本箱に毒々しくも、どこか愛らしい虫たちを収めたシリーズが代表作だ。

例えばジェラシー(嫉妬)を表す虫は、黒い背中が紫色の粒で覆われている。粒は吹き出物のようでもあり、ブルーベリーのようでもある。ピエロの仮面のような模様がある甲虫は、嫌われるのが怖くて本心を隠すためにおどけているのだという。

多くの人は川越さんの虫をグロテスクというより、かわいらしく美しいと感じるだろう。感情を醜く表現しない理由を「弱い部分とか、暗さとか。人間は心に持っている当たり前じゃないですか。それが前に進む原動力になることもある」と説明する。現在、入善町の下山芸術の森発電所美術館で企画展「YURIE PARK」を開催している。美術館に並ぶ虫はいずれも川越さんの分身のような存在だ。

虫が好きだったわけではない。触るのも怖かった。虫以上に人に臆病だった。

まず幼稚園になじめなかった。園庭で木の実を並べて1人で遊んだ。小学生の頃はリーダー的な存在の女子にいじめられた。いつも機嫌をうかがっていた。そうしないと無視される。そうしなくても無視される。「無視しないで」と言う勇気もなかった。中学校でも特定の男子生徒から、からかわれる日々だった。

トラブルを少しでも避けるための防衛策は「ヘラヘラすること」だった。あえておどけて振る舞った。「笑われていたら、何もされないと考えていました」。子どもの頃からのくせは抜けない。大人になった今もすぐに作り笑顔を浮かべてしまう。

つらい人間関係の中で、絵を描くことが救いだった。カレンダーの裏にオリジナルの漫画を描いた。おもちゃも自分で作った。魔法使いの杖も、セーラームーンのコンパクトも画用紙で作った。おもちゃ屋さんに行けば既製品が売っているのは知っていた。「親にねだるのが悪い気がした。でも、

誕生日に『本物』を買ってもらえた時はうれしかった」

図工や美術の時間も楽しかった。しかし、学校で自分の作品を褒められても「そんなことないよ。下手だよ」と卑下した。目を付けられないようにするためだった。

高校に入学すると、中学までの反動か、周りにはきつく当たった。思ったことをすぐに口にした。相手を思いやれば、言わなくてもいいことがたくさんあった。でも、そうしないと心に澱がたまっていた。同級生の悲しい顔を思い出すとつらくなる。「ひどい態度でした。完全に黒歴史」と振り返る。

◇

高校卒業後は、富山大芸術文化学部に入った。教員免許を取って美術教師になろうと思っていた。「絵は好きだから、やめな

いだろう」という消去法でもあった。

美術を学ぼうとする学生には個性派が多



「梅雨めぐ」 広田 郁世

い。何人かの同級生は、魅力的なスタイルを持っていた。なんとなく描くのが楽しかっただけの自分とは違う。描く姿も、作品もまぶしく見えた。憧れつつ、嫉妬した。自分だけの作風を模索した。

リビングで休んでいると、小学校の授業で作った標本箱が目に入った。ヒマワリやトウモロコシの種が整然と並んでいた。そこにいつからか頭にあった「嫉妬や寂しさは心に住み着いて卵を産む虫のよう」というイメージが重なった。ずっと引きずる鬱屈とした感情が標本箱の中で溶け合った。

心の弱さを表す虫の造形物を粘土で作り、木枠の中に並べてみた。大学3年の頃に参加したグループ展で初めて出品した。油彩を専攻していたので、立体造形は挑戦

だった。現在の作品に比べれば拙いものだったが、思いのほか好評だった。教授からは「この方向で行くといい」と背中を押された。「自分だけのスタイル」が定まった瞬間だった。

大学の卒業制作も標本箱だった。苦手だった虫はいとおしくなっていた。自然が豊富な大学のキャンパスには、いろいろな虫がいた。木に止まる姿を観察したり、死骸を拾ったりして構造をつかんだ。架空の虫とはいえ、リアルさを追求した。

1年かけて完成させたのは、背丈を超える150号の大作だった。カブトムシやクモ、蛾、そしてさなぎを思わせる造形物を200個近く並べた。ささくれ立つ感情を託した。制作しない日はなかった。「作品を作るだけの1年でした。嫌になっちゃうくらい。あれを乗り越えられたんだから、もう何があっても大丈夫」と自信を持った。

大学院進学後は公募展で受賞を重ねた。修了後は就職せずに作家活動を続けた。アルバイトをしながらの作家生活に不安はほとんどなかった。大学の卒業制作で大作を完成させられたことが支えになっていた。

その作家活動は、注目度の高い美術館の目にも留まった。金沢21世紀美術館から声がかかった。若手に発表の機会を与える企画に参加しないかという。学芸員の立松由美子さんが北陸3県の若手をリサーチしていたところ、大学院の修了展で川越さんという存在を見つけた。立松さんは「簡単には割り切れない複雑な感情を幻想性に富んだ虫の姿態に置き換えた上に、標本箱に分類して陳列して見せる様式の美しさも生み出しています」と評価する。



人間の感情を象徴する虫の造形物を制作する川越さん

2017年。美術館の真っ白な壁を色鮮やかな虫たちが彩った。「弱虫標本」と名付けた個展は盛況だった。作品を紹介するリーフレットは完売した。川越さんを高く買っていた現代美術に詳しい編集者の都築響一さんを迎えたトークショーも開いた。

都築さんは聞き上手だった。包み込むように質問してくれた。生い立ちについて尋ねられると、思いがあふれた。幼少期から中学校までの人間関係の難しさや、いじめを受けたことをひと息で明かした。ずっと胸につかえていたことだ。これまでは親しい人以外には教えていなかったことだ。

話し終わると、心が少し軽くなった気がした。個展という大切な舞台で、聴衆や都築さんと負の感情を分かち合えた。一区切りつけられた気がした。

◇

時々、少女時代を振り返る。いじめは容認できない。一方で当時のつらさは作品に昇華できた。結果的に美術家としての活動につながった。とはいえ、納得できない。

「今も誰かの顔をうかがってしまうのは昔の経験のせい。どうだったら良かったのか」と首をかしげる。一つだけ確信するのは、美術があってよかったということ。「もしなければ、ネットに誰かの悪口をずっと書き込んでいたかもしれない」と怖くなる。

かつて味わったつらさは乗り越えつつあるけれど、代わりに社会全体に教室のような息苦しさを覚える。SNSをのぞけば、ちょっとした失言や失敗をあげつらう人がいる。「みんな完璧じゃないのに、どうして他人の弱さを許せないんだろう」と憤る。

今、作品に込めるのは「弱くたっていい。間違ってもいい」という思いだ。最近、表現の幅が広がった。これまでのように標本箱に虫を収めず、直接キャンバスに配置したり、枝に固定したりしている。弱虫が枠の中から飛び出したのだ。

「標本の形にするのも好き。でも突き破ってみたいという思いもある」。作品には自信がある。好きだと言ってくれる熱烈なファンもいる。

「YURIE PARK」は6月9日まで開催中です。遊園地を思わせる演出で、とてもユニークな空間になっています。1階に展示されている美術館収蔵品と合わせてお楽しみください。7月12日からは射水市新湊博物館でも川越さんの企画展が開かれます。川越さんが生み出した虫たちが待っています。



「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141～160回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は7月1日(月)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局